

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 29 日現在

機関番号：27501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24593516

研究課題名(和文) フィジカルアセスメントに基づく日常生活行動・薬剤投与量調節の判断のツール開発

研究課題名(英文) Development of tool of judging daily living behavior and drug for Evidenced physical assessment

研究代表者

藤内 美保 (Tonai, Miho)

大分県立看護科学大学・看護学部・教授

研究者番号：60305844

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、看護師が在宅療養中の患者に対して、どのような日常生活援助、薬剤投与の判断をしているのかを明らかにした。全国の訪問看護師の調査によれば、日常生活援助の判断は行っているものの、医師に依存するステーションの体制があった。また薬剤投与は事前の指示があっても医師の許可を得ていた。

一方、高度実践看護師は、日常生活援助の判断を行い、家族や他職種に教育や対応依頼を行い、臨床推論に基づく薬剤選択、さらに医師との連携による効果的な治療方針の決定まで行っていた。今後在宅医療が推進され、重症化する在宅療養者の看護を担う看護体制や教育の整備の重要性が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)： In this study, the visiting nurse revealed the daily living behavior and the judgment of the medicine to the patient. We conducted a survey of visiting nurses across the country. The visiting nurse judged the patient's daily living behavior. However, the nurse got permission from the doctor and given the medicine even if instructed in advance.

Meanwhile, advanced practicing nurses judged their daily living assistance, and asked for their education and correspondence to their families and other occupations. In addition, drug selection based on clinical reasoning was made, and treatment policy was determined by cooperation with doctors.

研究分野：在宅看護

キーワード：訪問看護 日常生活行動 薬剤 臨床判断 在宅医療

1. 研究開始当初の背景

現在、チーム医療への関心が高まっているが、チームの中で看護職が専門性を発揮し、エビデンスに基づき療養生活に対する自律的な判断、指導・支援できる能力を高めることが重要である。また医師の事前指示に基づく薬剤の投与量の調節が可能であることを看護師自身に周知されていない現状もある。患者の最も身近な存在で、患者の状態を把握している看護職が、看護ケアの延長線上でタイムリーに日常生活行動を判断し、薬剤の投与量を調整できれば、患者・家族の QOL 向上に貢献する。医師は往診の患者の状態と訪問看護師による新たな患者情報により、治療方針や薬剤種類・量などを決定する。そのため訪問看護師が根拠に基づくフィジカルアセスメントの情報を適切に報告することで、医師の事前指示やその場の具体的指示の判断につながるため、訪問看護師のフィジカルアセスメント能力は重要であり、質担保のためにもツール開発の意義は高いと考える。

2. 研究の目的

在宅療養中の呼吸機能障害患者に対して、訪問看護師が行っているフィジカルアセスメントと日常生活行動の判断および薬剤の投与量の調節に関する判断の全容を帰納的に解明する。次にフィジカルアセスメントに基づく日常生活行動の判断と薬剤の投与量の調節判断にするツール開発を行う。さらに開発したツールの信頼性・妥当性を検証する。検証結果をフィードバックし、改善案を提案する

3. 研究の方法

研究 1 は、「訪問看護ステーションにおける 24 時間対応体制の現状」を明らかにした。A 県内の訪問看護師と在宅支援診療所の医師に自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、訪問看護師がフィジカルアセスメントしたことをどのように判断し医師に報告しているのか、在宅支援診療所の医師の 24 時間対応の実態、訪問看護師のフィジカルアセスメントに関する課題も明確に

する。

研究 2 は、研究 1 の原案をもとに実践的活用ができることを目的に、訪問看護ステーション管理者と医師にインタビューを行い、呼吸困難症状に対する訪問看護の質の向上と標準化及び医師との連携の為にプロトコルシート作成をした。

研究 3 は、2013 年に訪問看護による在宅療養者に対する 24 時間対応の現状と課題を調査し、その結果をもとに訪問看護師の質向上と標準化及び医師との連携を目的に“呼吸困難症状への対応”に焦点化したプロトコルシートを試作した。実用性の検証は訪問看護認定看護師を対象に質問紙及びインタビュー調査を行った。

研究 4 は、医学的・看護的視点を持つ高度実践看護師 (NP) の訪問看護による、日常生活行動の判断や薬剤投与の判断について、重度な褥瘡をもつ患者への判断をインタビュー調査により明らかにした。対象は C 県の訪問看護ステーションに勤務する高度実践看護師 (NP) 1 名である。治療・ケアを行った褥瘡症例 2 名について、インタビューガイドに基づき褥瘡の経過と高度実践看護師 (NP) の対応について半構造的面接を行った。逐語録を基に、褥瘡の経過に応じて症例の情報を整理し、高度実践看護師 (NP) のアセスメントや対応をカテゴリー化した。

4. 研究成果

研究 1 について、訪問看護師を対象にした回収数は 43 件 (回収率 53.1%)、在宅支援診療所の医師は 96 件 (回収率 54.9%) であった。実態と課題を解決するプロトコルを作成するため、「看護師が観察した項目」「看護師の対応」「病状変化の判断と対応」が抽出しプロトコルの原案を作成した。研究 2 については、本研究はプロトコルの原案のテーマ選定と作成を目的

とした第 1 ステップと、現状で適応できるプロトコルかどうかを検証し、実用性の高いプロトコルを試作した。

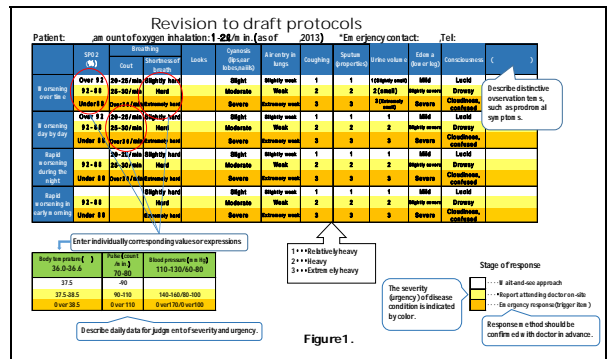
研究 3 は、試作したプロトコルは、短時間で使用できるトリアージ的な使い方を旨し、1 枚のシートに収めるように作成した。そのため、構成がやや複雑なものとなった。そこで、研究 3 では質問紙調査及び面接調査で得られた回答内容をそれぞれ再分析し、先行研究の結果も参考とし、その内容・構成を再検討、再構築することを目的とする。再構築では、使い易さ、簡便性に注目し、現状に応じた内容で短時間に呼吸困難症状に対するアセスメントと対応の判断ができるものとし、実用性の検証は訪問看護認定看護師を対象に質問紙及びインタビュー調査で行う。訪問看護の現場では、医師の診断と訪問看護師による患者情報をもとに治療やケアの方針が方向付けられ、患者自身や家族の同意のもとそれらが実施される。その為、訪問看護師が根拠に基づいたフィジカルアセスメントの情報を的確に医師に報告することが、医師の事前指示やその場の具体的指示の判断に繋がる。藤内らによる調査では COPD 患者の清潔ケア中の酸素吸入量の調整について、約 70% の訪問看護師が事前指示を受けているにも関わらず、その都度医師に吸入量を確認しているという結果が報告されている。このプロトコルシートが在宅療養の場で活用されることで、訪問看護師のアセスメント力・判断力を高め、医師との連携のもと、より質の高い訪問看護の提供と、その標準化が期待でき、活用の意義は大きいと考える。

Concrete opinions about practicability and utilization of draft protocols

Opinions/comments obtained			
Advance of disease condition (rate of change)	Observation item (frequency)	Evaluation of severity (severity level)	Utilization
<ul style="list-style-type: none"> •Classification of rate •Expression of rate •Target of evaluation 	<ul style="list-style-type: none"> •Free description •Objectivity •Classification 	<ul style="list-style-type: none"> •Criteria •Selective/check type •Classification of evaluation 	<ul style="list-style-type: none"> •Individuality •Education



Prototype of triage-like protocols allowing short-time judgment



研究 4 について、褥瘡で在宅療養している A 氏：(40 代男性。ヘルパーが介入しながら 1 人暮らし。左坐骨部切開後 158 日目で訪問終了。) B 氏：(40 代男性。ヘルパーが介入しながら母親と 2 人暮らし。右坐骨部切開後 208 日目で訪問終了。) 分析の結果、コード 56 個、中カテゴリ 8 個、大カテゴリ 3 個を抽出した。以下[]は大カテゴリ、[]は中カテゴリ、< > はコードを示す。

[臨床推論に基づく創評価と薬剤選択] NP は < 職場の休憩時間でも除圧がされていない > など 本人の生活スタイルを考慮した創評価 を行っていた。医学と看護の統合した視点で患者を診る(光根 2013) NP だからこそ、対象者の生活スタイルを細部まで把握することができ、生活の中で創の治癒に影響する些細な障害・促進因子を見極めることができると考える。また、< 創の経過が良好であるため、クリームが使用可能 > など 創評価による薬剤選択 を行い、迅速な対応や早期治療につながっていた。さらに、NP の介入により、重度な褥瘡でも対象者の望む環境下で治療ができ、QOL の維持・向上につながっていた。

[悪化予防行動定着に向けての本人への介入] NP は対象者へ < プッシュアップ法を指導 > するなど 悪化予防の指導による本人への意識付け を行っていた。繰り返しの指導により、毎日の除圧行動を定着化させ、悪化が繰り返される原因を根本的に改善していた。また、< 本人とともに車椅子選択 > をするなど 本人の意思を尊重した創の治療と悪化予防への働きかけ を行っていた。可能な限り希望や好みなどを取り入れることが、意欲的な除圧環境の維

持につながると考える。

[創の治癒に向けた他職種連携とマネジメント] NPは<ヘルパーへの付け替え、食事、入浴法指導>や<母親への褥瘡の原因、食事、付け替え指導>など 家族を含めたスタッフへの悪化予防能力の教育 に加え、<福祉用具業者にクッション圧の調整を依頼>したり、<栄養士に母親への食事指導を依頼>するなど 病院内外のスタッフとの連絡・調整

を行っていた。NPによる他職種への指導・調整が、統一されたケアの提供や円滑な他職種連携につながると考える。また、NPは<.医師へ治療方針について相談>するなど、医師との連携による効果的な治療方針の決定 を行っており、医師とのディスカッションが、最も適した治療方針の決定につながっていた。さらに、NPは<業者から薬剤の資料取り寄せ>を行うなど 他職種との連携によるNP自らの知識・技術向上 を図っていた。自らも他職種から指導を受け技術の向上や新たな知識の習得を図ることにより、チーム一人ひとりの意識も高まり、ケアの質が高まると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

Yayoi Sato, Miho Tonai, Creation of pilot protocol for sudden changes in home care patient conditions Judgment and Support by Visiting Nurses - In association with the symptoms of Dyspnea and cooperation between visiting nurses and physicians - Journal of medical safety , 82-86,2015.

[学会発表](計 4件)

Miho Tonai,Sayaka Seiko,Yayoi Sato, Case Study regarding Judgment and Risk Prediction of Visiting Nurses in Japan. International Association of Risk Management in Medicine(IARMM), September 10 – 12, 2014 Madrid, Spain

Yayoi Sato, Miho Tonai, Creation of pilot protocol for sudden changes in home care patient conditions Judgment and Support by Visiting Nurses - In association with the symptoms of Dyspnea and cooperation between visiting nurses and physicians - , International Association of Risk Management in Medicine(IARMM) September 10 – 12, 2014 Madrid, Spain

Yayoi Sato Miho Tonai, Practical evaluation of a protocol sheet to improve and standardize home nursing care and enhance cooperation with physicians in the care of symptoms of dyspnea.

International Association of Risk Management in Medicine(IARMM) , 28 - 30 September,2015 ,Vienna, Austria

清家早矢佳,藤内美保,訪問看護師の生活行動レベルの判断と根拠 在宅療養者の事例を用いた調査より - 第34回日本看護科学学会学術集会 名古屋 2014.11.29-30.

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 藤内 美保
(TONAI MIHO)

大分県立看護科学大学・看護学部・教授
研究者番号：60305844

(2)研究分担者 佐藤 弥生
(YAYOI SATO)

大分県立看護科学大学・看護学部・助教
研究者番号：40550900

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
()

